

仕事の人類学

—労働中心主義の向こうへ

中谷文美・宇田川妙子編
世界思想社 / 2016年 / 本体 4,000円+税

本書は、「仕事」とは何かという問いを、各地の仕事・労働の現場にかんする民族誌的な調査をとおして考察していこうとするものである。

現在、仕事や労働は、世界のどこでも、近代化やグローバル化、移動・移民の増加等によって、人々の生活のなかでますます重要性を増している。それは経済的な意味だけではなく、無職だと社会的不適格とされかねない等、アイデンティティや人格にまでかかわる問題になっている。この状況は、労働中心主義という言葉で、とくに近代以降強化されてきたと指摘する論者も多いが、そうした仕事・労働にかんする実態や理論の研究は、これまで社会学、経済学、思想史等々の分野ですでに数多くなされている。

一方、人類学では、サーリンズが述べているように、仕事や労働という範疇自体が多くの人類学の対象社会では明確な生活領域として成立しにくいとみなされてきたせいも、重要な研究テーマとはされてこなかった。しかし、労働中心主義が世界を席卷するようになってくるにつれ、それぞれの社会における仕事や労働をそのリアリティに沿ってあらためて見ていく必要性は高まっているに違いない。たしかに現在、西洋近代的な仕事・労働の影響力は大きいだが、その実態や人々の考え方は、やはり各社会文化によって異なっている。同じ社会のなかでもジェンダーをはじめ年齢・世代等による違いもある。また労働中心主義の発祥地たる西洋でも、英語のlaborとworkという語の使い分けがあるように、働くことの意味は決して一義的ではない。本書では、働くということをより広義に捉える語として、便宜上「労働」ではなく「仕事」を選択しているが、各地の仕事や労働をめぐる表現ひとつとっても、簡単には整理できない。そして、そうした複雑で多面的な実態を、歴史的変遷とともに十分に認識することは、現代社会の仕事・労働観の根源的な再検討の際にも必須であろう。それは、仕事・労働研究全般に対する人類学からの貢献にもなる。

本書は、こうした問題意識のもと組織された共同研究「ジェンダー視点による『仕事』の文化人類学的研究」(代表：中谷文美、2008-2011年度)の成果である。

I部「性別分業の揺らぎに向き合う」では、まずは仕事とジェンダーのかかわりに注目し、ウズベキスタンの刺繍業(今堀恵美)、ブルガリアの農村女性(松前もゆる)、日本人女性とパキスタン人男性の越境結婚(工藤正子)、東北タイの女性の出稼ぎ(木曾恵子)の事例をとりあげる。これらの事例では、性別分業の規範が根強い一方、実践場面では柔軟な

対応がなされている。しかしそこからは、性別分業そのものが、どの社会・時代にあっても、規定的なもので、さらにはジェンダーだけにかかわるものでもなく、個々の夫婦、家族、周囲の社会、国家、宗教等の状況や立場に応じて利用・解釈され、交渉されていくなかで発現していることが明らかになった。とくに女性の労働には、そうした家族、国家、民族、宗教等の様々な秩序の交渉が端的に映し出されている。

II部「<労働>概念の外延を広げる」は、主として男性の働き方に注目して、労働中心主義的な働き方とは異なる仕事のあり方、仕事観に光を当てる。インドネシア・バリ島の労働者(中谷文美)、カラハリ砂漠の定住化した狩猟採集民(丸山淳子)、タンザニア都市の零細商人(小川さやか)、イタリアの雇用労働者(筆者)の事例からは、仕事それぞれの社会の様々な価値と結びつき、それゆえ、経済的報酬とは無関係に仕事をしたり、一時期に複数の仕事にかかわったりという柔軟な実態が見えてくる。それらは賃金労働を過剰評価してしまいがちな現代社会の仕事観を相対化する格好の事例である。

また、そうした現代社会のひとつ、日本の労働観をあらためて考え直すため、III部「労働とジェンダーの軌跡をたどる」では、戦後日本における女性労働と男性労働にかんする研究蓄積をそれぞれ批判的に振り返りながら、新たな労働研究の方向性を探る論文2本(前者は木本喜美子、後者はジェームス・ロバーソン)を所収している。そして本書ではさらに、ノートという形で、インドネシア、東マレーシア、北アフリカ、北欧等での事例にもとづく5つの小論を加え、仕事に向き合う人々の多様な姿をひとつでも多く紹介しようと試みた。

仕事の人類学という試みは緒についたばかりである。働くことは、その内実や位置づけが変わっても、どの社会において欠かせない営みであるとともに、グローバル化によって賃金労働化等の波にさらに浸食されていくに違いない。その意味で仕事の人類学は、その必要性のみならず、議論の射程も可能性もますます拡大しつつある。本書はそうした仕事・労働に関する今後の研究において起点または基点となるであろうことを確信している。

文 宇田川妙子

国立民族学博物館民族社会研究部准教授。専門は文化人類学、イタリア研究、ジェンダー研究。主な業績に、『城壁内からみるイタリア』(臨川書店2015年)、『ジェンダー人類学を読む』(中谷文美との共編著、世界思想社2007年)。

